

# 東北・九州地方における湯治場の機能変化

小堀 貴亮

大阪観光大学観光学研究所客員研究員

## I はじめに

### (1)研究の背景と目的

近年、自然環境や温泉情緒に優れ、本物の温泉を堪能できる伝統的な湯治場への志向性が強まっている。巷の旅雑誌や温泉情報誌などでは、「湯治」や「療養・保養」という文字が至るところにみられ、旅行番組などでも「湯治場」や「秘湯」などというかたちで、情緒溢れるひなびた温泉地が頻繁に紹介されている。また、旅行業者も「湯治」と銘打ったツアーを催行し始めており、特に若い世代の女性に人気を博しているという（進藤 2004）。このことは、温泉地本来の機能を幅広いニーズが求める傾向にあることを如実に示している。

このような中、現在、東北や九州の一部のように古くからの湯治場の伝統を色濃く残す温泉地が見直されている。自炊施設を整えた湯治棟は、食事付の低廉な湯治料金を設定し、湯治客用の食事の工夫をしている宿も雑誌等で多く紹介されている。さらに、これまでは湯治客に目を向けていなかった観光旅館でさえ、季節限定で湯治プランを用意する宿が増えている。

そこで、本研究では、東北および九州地方における代表的な湯治場として、最近の温泉地に関するメディアや情報媒体における掲載度が著しく高い宮城県東鳴子温泉および大分県鉄輪温泉を事例として、現在に至る湯治場の機能変化を明らかにしたい。

### (2)研究対象地域の概要

#### ①宮城県東鳴子温泉

東北地方を代表する一大温泉郷である宮城県鳴子温泉郷は、東から国道 47 号沿いの川渡・東鳴子・鳴子・中山平と、少し離れた国道 108 号沿いの鬼首を含めた 5 つの温泉地からなる。特に、鬼首・中山平・川渡は、昭和 35 年に奥鳴子・川渡温泉郷として環境省の国民保養温泉地に指定されている。鳴子温泉郷の源泉数はおよそ 370 本もあるといわれ、ほとんど全ての泉質が揃っている。中心の鳴子温泉以外は未だに湯治場の伝統を受け継ぐ家族経営の湯治宿が多いのが特徴である。東鳴子温泉は、荒雄川沿いに閑静で情緒溢れる湯治場景観を形成している。鳴子御殿湯という駅名が示すように、古くは伊達藩主の湯治場であったという歴史を有する。今日なお 14 軒の旅館中 11 軒が自炊可能な湯治宿として機能しており、江戸時代開湯という伝統を持つ有力な湯治旅館から、昭和以降の新設旅館まで、多くの自炊湯治客を受け入れており、まさに現代的湯治場としてのイメージ形成が定着しているのである。

現在、鳴子温泉郷には町立鳴子病院と温泉療養医の協力を得て、より安心して快適な湯治生活を送るための「温泉療養部会」があり、20 軒ほどの宿が参加しているが、その中心を担っているのが東鳴子温泉である。各旅館はほとんどが独自の源泉を持ち、1 軒で複数の泉質を持つ宿も多い。また、温泉分析書の効能とは別に、長い湯治の伝統の中で得た経験的効能を熟知している宿も多い。また湯治宿の宿泊料金も 1 泊平均 3,000～5,000 円と低廉であり、療養目的に長期滞在する湯治客が後を絶えない。

しかし自炊中心の湯治場としての機能は近年大きく変化し、湯治客のみならず、都会の保養客に

滞在型温泉地としての場を提供しており、今後の健康志向を柱とした保養温泉地づくりのモデルともなり得るのである。

## ②大分県鉄輪温泉

大分県別府温泉郷は、浜脇・別府・観海寺・堀田・明礬・鉄輪・柴石・亀川の8温泉地で構成され、源泉数約2,850（うち自噴約510）、総湧出量毎分約95,000リットル、公衆浴場数約150などいずれも日本一である。鉄輪温泉は、別府市街地の北西約8kmのところに位置しており、別府温泉郷の中でも最もシンボリックな景観となっている。古くから交通の便がよく、1921（大正10）年には地獄循環道路として県道が完成し、1964（昭和39）年には九州横断道路が開通した。鉄輪温泉には、かつては自炊専門の50軒もの入湯貸間があり、約1週間から10日間もの滞在をする湯治客に支えられて旅館経営が成り立っていた。昭和60年には、明礬と柴石を加えて「国民保養温泉地」に指定され、現在もお長期滞在のための自炊旅館（入湯貸間）があり、食事付きであっても低料金の保養温泉が多くて、湯治場としての機能が根強く維持されている。そして、近年ますます湯治を基調として地域形成が進められている。

また、鉄輪温泉は、全国的に知られた観光資源である地獄地帯にあって観光客も多く、観光旅館が71軒もあるが、湯治客中心の自炊旅館地区と観光旅館地区とは地域的に分化している。自炊旅館地区には、入湯貸間のほか食料品店・雑貨品店・食堂などが密集している。湯治客は、地下からの蒸気を利用した地獄釜で炊事をし、豊富な温泉に浸かって保養しているのであり、旅館ごとのロコミによる局地的な湯治圏が形成されてきた。

さらに、別府を代表する共同浴場である「蒸し湯」をはじめ、7つの共同浴場がある。蒸し湯は、薬草の石菖が敷き詰められた石室に横たわる入浴法で、それは古代から中世にかけての一般的な入浴法であったといわれる。蒸し湯は鎌倉時代に一

遍上人によって開湯され、鉄輪温泉発祥の源であるといわれる。他の7つの共同浴場は、集落内の各所に散在しており、狭い路地空間や各所に立ち込める湯煙とマッチして、日本でも他に類を見ない情緒ある伝統的湯治場空間が形成されている。

## Ⅱ 東北地方における湯治場の機能変化 —東鳴子温泉の事例—

### (1)湯治場の地域変化

鳴子町は玉造郡に属し、『統日本紀』の837（承和4）年の条に、玉造塞の温泉石神（川渡温泉）が記されており、古くから温泉が存在していたことを知りうる。

旧大口村に属する川渡温泉は歴史が古いのに対して、川渡に近い同村内の東鳴子温泉は開発が比較的新しいといえようが、江戸時代には鷹ノ巣・田中・赤湯の各温泉があった。鷹ノ巣温泉は中世以降に成立したと言われ、隣接した田中温泉は温泉湧出年不詳であるが、幕末の1834（天保5）年に開湯したといわれる。赤湯（赤梅に由来）は江戸時代中期にはその記録があり、1772（明和9）年の『封内風土記』に「赤湯は熱湯なり。疝気、寸白虫（婦人疝気）を治す」と記され、脚気の川渡、瘡の鳴子に次いで知られていた。仙台藩主や岩出山城主の遊楽地でもあり、幕末の1863（文久3）年、仙台藩主伊達慶邦は夫人とともに赤湯で湯治をしたので、この頃から赤湯が「御殿湯」とも呼ばれるようになったという（鳴子町史編集委員会 1974）。

このように、古来から有数の湯治場として記録に残されている東鳴子温泉は、第2次世界大戦後も戦前と変わることなく湯治場として機能してきた。1960年代以降の高度経済成長期に、近隣の鳴子温泉が観光化を遂げる中で、旧川渡村村長や鳴子町長を努めた田中温泉の旅館主は、湯治場の重要性を強く認識しており、自炊湯治場としての東鳴子温泉のイメージアップを図り、自らも自炊

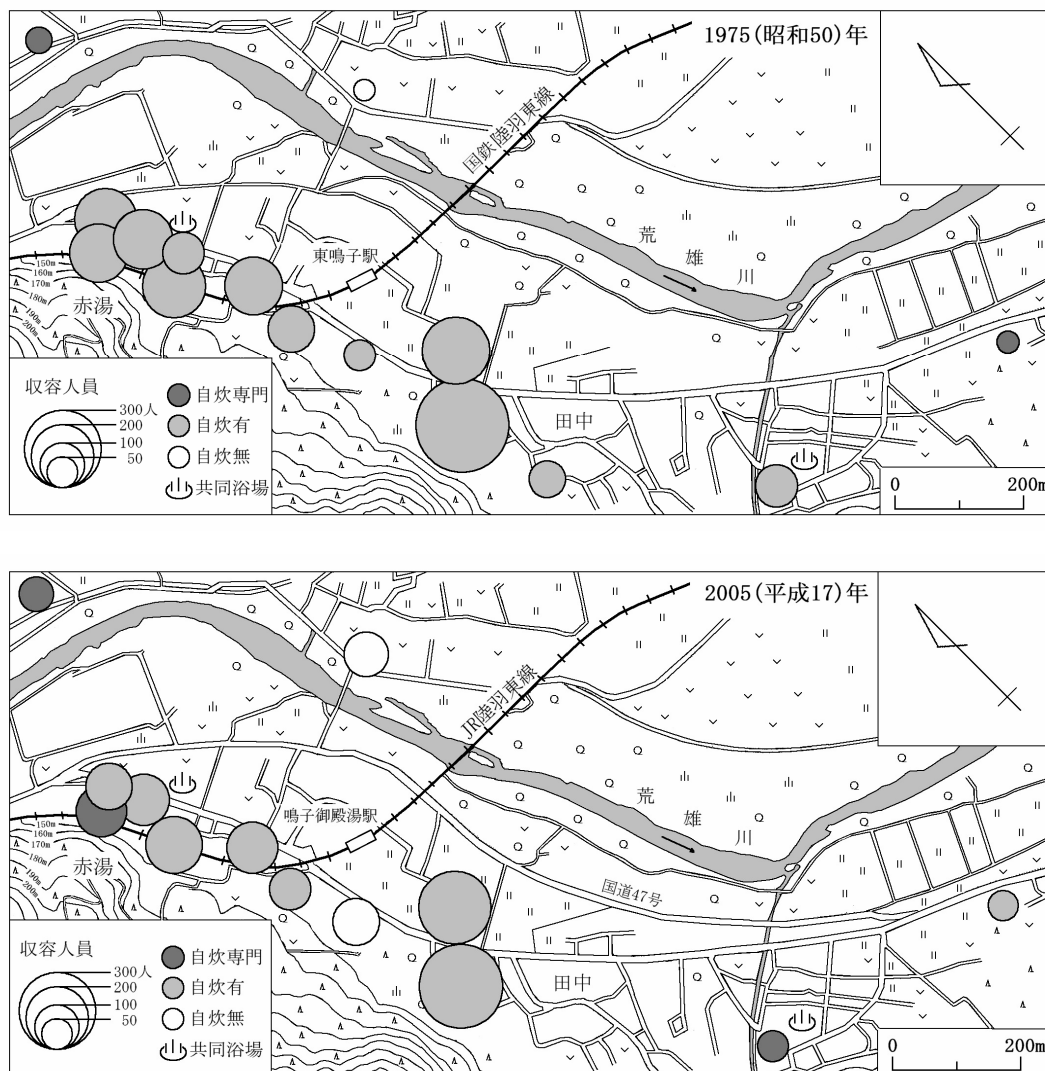


図1 東鳴子温泉における旅館の分布と地域変容（1975・2005年）

（注）鳴子町史および実地調査により作成。

棟の増設を進めてきた（山村 1977）。

ここで東鳴子温泉の地域構成とその変化を見よう（図1）。1975年と2005年における東鳴子温泉の集落構成をみると、さほど大きな地形および土地利用変化はみられない。西部を構成する赤湯に旅館が集中して温泉街をなし、赤湯の旧道沿いに一般商店や飲食店・土産品店などが密集し、その他の地区では道路沿いに点在している。温泉街

の背後には急崖が迫り、スギやヒノキが植林されており、緑いっぱいの快適環境を醸成し、反対側には荒尾川が形成する平坦地があり、水田や住宅が広がっている。田中湯には収容規模の大きな自炊中心旅館があることは共通しており、大きな地域変化はみられない。ただし、1975年はほとんどが半自炊であるのに対し、2005年現在の方が自炊を強調した旅館が若干増えている。そして、

自炊機能の変化を旅館の収容人員からまとめたのが、表1である。1975（昭和50）年の時点では、20軒の旅館中4軒が自炊のみ、10軒が自炊中心の旅館であり、湯治場としての機能が著しく強かった。20年後の1995（平成7）年でも、旅館数は14軒に減少してはいるが、自炊機能に大きな変化はなく、湯治市場の維持とすでに現代的湯治場づくりへの地域構成員の意識が醸成されていたことを知りうる。

このような田園景観が広がる閑静な東鳴子温泉は、自炊旅館や旅籠旅館の存在とあいまって、今も変わらず伝統的な療養型温泉集落が形成されているのである。

## (2)入湯客の地域変化

続いて、東鳴子温泉における高度経済成長期から現在にかけての入湯客の地域変化をみたい。図2は、東鳴子温泉のある自炊旅館における宮城県内湯治客の市場性の変化を示したものである。自炊湯治客の多くが集まった1967（昭和42）年のA旅館と、2000（平成12）年のB旅館の宿帳を整理した。1967（昭和42）年をみると、高度経済成長期真っ只中において、A旅館は2万2,000人余りの延自炊湯治客を集め、その湯治市場構成は宮城県内が72%（うち郡部50%、市部22%）に達し、東北地方を加えると95%を占めた。特に、栗原郡・石巻市が多く、その他では桃生・遠田・加美・登米・牡鹿の郡部が上位にランクされ、仙台平野北部の農村地域と三陸海岸の漁村地域と強く結合していたことがわかる。さらに、平均宿泊日数をみると、ほとんどの市郡において10泊以上を示しており、長期滞在による湯治が行われていたことが明らかである。基本的には農民・漁民の利用が多く、湯治入湯圏はこれらの湯治客の口コミによって形成されるので、局地性がますます強められてきたのである。

一方、2000年時点のB旅館の例をみると、自炊湯治客は延1万8,000人を数え、宮城県内が

77%（郡部46%、市部31%）と著しく高率であり、30年以上前と変わっていない。しかし、気仙沼市や牡鹿郡の漁民による1週間以上の湯治形態が残されているものの、その他の市郡ではほとんどが5泊前後、あるいは2～3泊程度の短期滞在に変化しており、生活スタイルの変化を背景とした湯治形態の変容が認められるのである。もちろん、旅館によって市場構成比に若干の地域的差異はあるが、平均滞在数は半分の5泊程度に減っていることは、近年の社会経済情勢を反映したものである。すなわち、農家や漁家が兼業化し、十分な余暇が取れない傾向にあり、またかつては娯楽が乏しかった農漁村から青壮年層の入湯客が多く来訪していたが、今日では農漁村環境が一変するとともにその数を減じ、湯治客の高齢化が一層進展してきたことを物語っている。特に60代以上の比率は、30年間に45%から64%へと増加している。

さらに、東鳴子温泉の1974（昭和49）年と2001（平成13）年の自炊湯治客と旅籠観光客の季節性の変化を見ると、大きな変化が起きていることが明らかとなる。すなわち、1974年では約15万人の宿泊客のうち、自炊湯治客が約70%（10万5,000人）を占め、農閑期の冬季に農民が著しく集中し、これに漁民が加わっていた。観光客は数が少ないものの、通年にわたって均等に来訪していた。山村（1977）による調査結果では、40人中保養目的が19人と半数を占め、病状では神経痛・リウマチ14人、胃腸病2人、腰痛3人、その他2人であった。ここに、農漁民の重労働後の骨休みの場として、東鳴子温泉の湯治場が機能しているのであり、旅籠を利用する湯治客もかなりいたことが明らかである。

これに対し、2001年では23万人の宿泊客のうち、自炊湯治客は12%（2万6,000人）に過ぎなくなり、観光客は88%へ急増して逆転した。その季節も、秋に紅葉シーズンにピークがあり、通年的に客を集めるようになった。ここに、東鳴子温泉においては、長期滞在用の自炊施設を擁しつつ



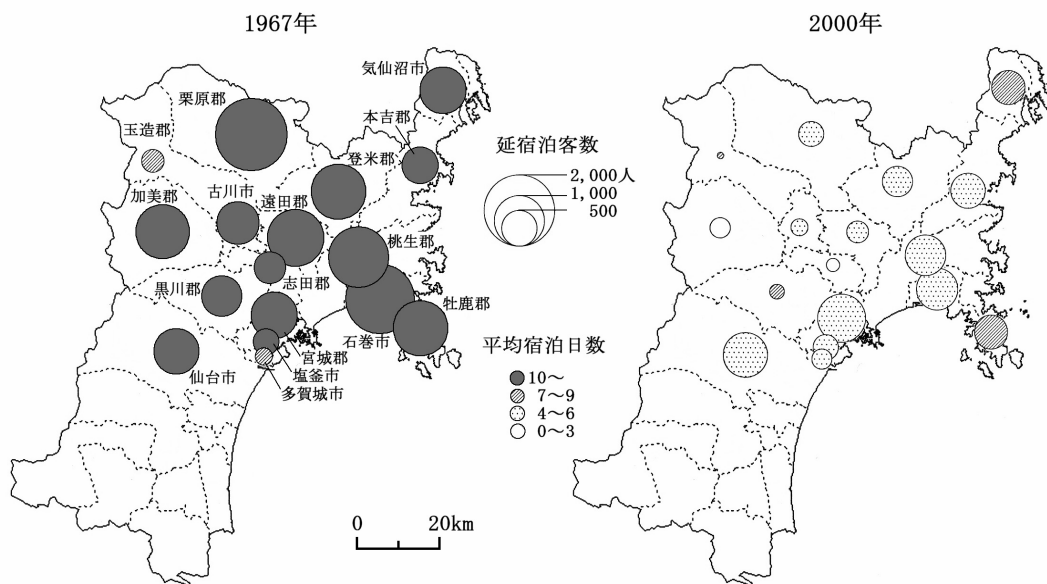


図2 宮城県における東鳴子温泉湯治客の市場性の変化（1967・2000年）

（注）東鳴子温泉2旅館の資料を集計して作成。

も、都会の短期滞在保養客を多く受け入れるようになりつつあり、旅館業の新たな展開を読み取ることができよう。

### (3)新しい地域づくり

東鳴子温泉は閑静な地域環境下にあり、なによりも観光化がもてはやされる時代にあっても、自炊湯治客をはじめ保養客を大切にもてなす経営感覚を、各旅館が共通して認識してきた歴史がある。各旅館は自炊専門・自炊と旅館併設・旅館専門のように、経営形態に若干の違いはあるものの、現代的湯治場を目指して、新たな持続可能な温泉地域を構築しようとの理解は共通している。地域を挙げての体制が整っていることは、今後の地域振興策を実行していく上で最大の武器となろう。東鳴子温泉では、このような自炊施設を有する旅館を中心に、町立温泉病院と一体化して「温泉療養プラン」を推進している（菊池 2003）。

このプログラムは、温泉の療養的活用を図るために、現代医学と提携しながら、さまざまな温泉療養プログラムを企画し、実行することを目的と

している。温泉の治癒力向上を図るとともに、その効果を見える形で提供し、そのための具体的内容は、①鳴子町立温泉病院との提携促進、②さまざまな疾病に対応する療養プログラムの作成、③湯治客を受け入れる旅館と地域の再点検などがあげられる。

このような東鳴子温泉の新しい湯治場形成への取り組みは、湯治が今なお年中行事として欠かせないと東北地方の住民がもとより、湯治や保養がブームとなりつつある現在、温泉地本来の機能を求めている最近のニーズや都会の保養客などにとっても、滞在型保養温泉地づくりの一つのモデルとして評価される。

また、地元旅館経営者によって結成されている東鳴子ゆめ会議は、「湯治」を掲げた様々な企画を打ち出し、精力的に活動している。中でも特筆されるのが、2003（平成15）年11月25日から2泊3日で実施された「現代湯治入門 東鳴子温泉3日間ツアー」である（大沼 2004）。このツアーは、東鳴子温泉独自のスタンスで、現在における温泉療養というものを改めて再考し、湯治客にも

体験してもらうという画期的なものである。一方、このツアーの開催側の主旨は、普段やっていることをもう一度見つめ直し、普段通りのサービスを提供することであり、お金をかけることなく現在の体制で工夫してできる新たなサービスを創り出すことであった。湯治場においては、イベント的な魅力よりは、日常的にどのようなサービスを提供できるかのほうが重要であり、このツアーで取り組まれたことが、そのままツアー終了後も商品として残されることで、後世まで持続可能な湯治場として発展していくのである。

### Ⅲ 九州地方における湯治場の機能変化 —鉄輪温泉の事例—

#### (1)湯治場の地域変化

鉄輪温泉は、地域全体に湯煙が立ちのぼる一大熱地帯であるが、この地が温泉場として成立したのは、鎌倉時代の1276（建治2）年に、時宗の開基一遍上人が来湯して「蒸し湯」（石風呂）をつくり、湯治客に供したことによると言われている。この蒸し湯を核として湯治場の原型は、現在にいたるまで残されている。

幕末の1865（慶応元）年に7～8軒あった宿屋は、1913（大正2）年には13軒に増えており、約7万人の宿泊客を数え、さらに昭和初期には自炊式の貸間が増えて20数軒になったと言う。宿泊客数は1915年までは6～7万人台で推移していたが、その後増加傾向に転じ、1919年には最高の12万人を超えたのである。それ以後は客が減少して、1932（昭和7）年には再び6万人へと半減した（山村 1974）。季節性は冬から春にかけての寒い時期に寒湯治に来る人々多く、地熱で暑い夏から秋にかけては湯治客が少ないパターンを呈していたこの傾向は、現在でも大きく変わることはない。

第2次世界大戦後においても、鉄輪温泉は湯治客として発展してきた。1964（昭和39）年に別

府と阿蘇・熊本・長崎を結ぶ九州横断道路が近くを通ることになって、一部に道路沿いに観光化の動きが見られたが、古くからの湯治場は大きく変わることはなかった。

鉄輪を特色づける宿泊施設は、地熱の噴気を利用した地獄釜を待つ自炊旅館であり、入湯貸間として多くの湯治客を受け入れてきた。1969年の時点で50軒もの入湯貸間があったが、以後客のニーズに合わせて急速に食事付きの旅館に変化するようになってきた。旅館も70軒を超えており、滞在客相手の土産品や食堂を中心した飲食店も数多かった。貸間旅館は長期滞在の湯治客を対象とした自炊を要する旅館ということで、食事の材料や生活用品は、宿泊客自らが商品などで購入しなければならなかった。その意味では、貸間旅館の発達が一般商店の経営存続に影響を与えたともいえよう（山村 1974）。

2002年になると、旅館の減少も見られるものの、入湯貸間の減少が顕著であったことが明らかである。マッサージ院がかなり残っているのは、湯治場としての性格を反映したものである。

一方、九州横断道路沿いやその西部には、大規模な旅館やホテルが相次いで建設された。往年の1泊宴会型ともいえる観光客対象の旅館・ホテル集中地区となっており、ここに鉄輪温泉は、世界的な温泉資源である地獄地帯の一角にある「みゆき坂」通りから南部にあたる九州横断道路沿いの観光地区と、その東の「いで湯坂」通りに沿った貸間旅館が集中する湯治場地区とに地域区分されているのである（浦 2005b）。

ここで、その地域構成の変容を特に旅館業の分布から検討する（図3）。高度経済成長が頂点に達した1973（昭和48）年と2002（平成14）年現在の変容をまとめると、まず地図の範囲で36軒あった自炊旅館は13軒となった。自炊から食事付旅館へ変わったものが16軒、自炊旅館として今日まで継続しているものが5軒、廃業したものが15軒に及んだ。一方、食事付旅館から自炊旅

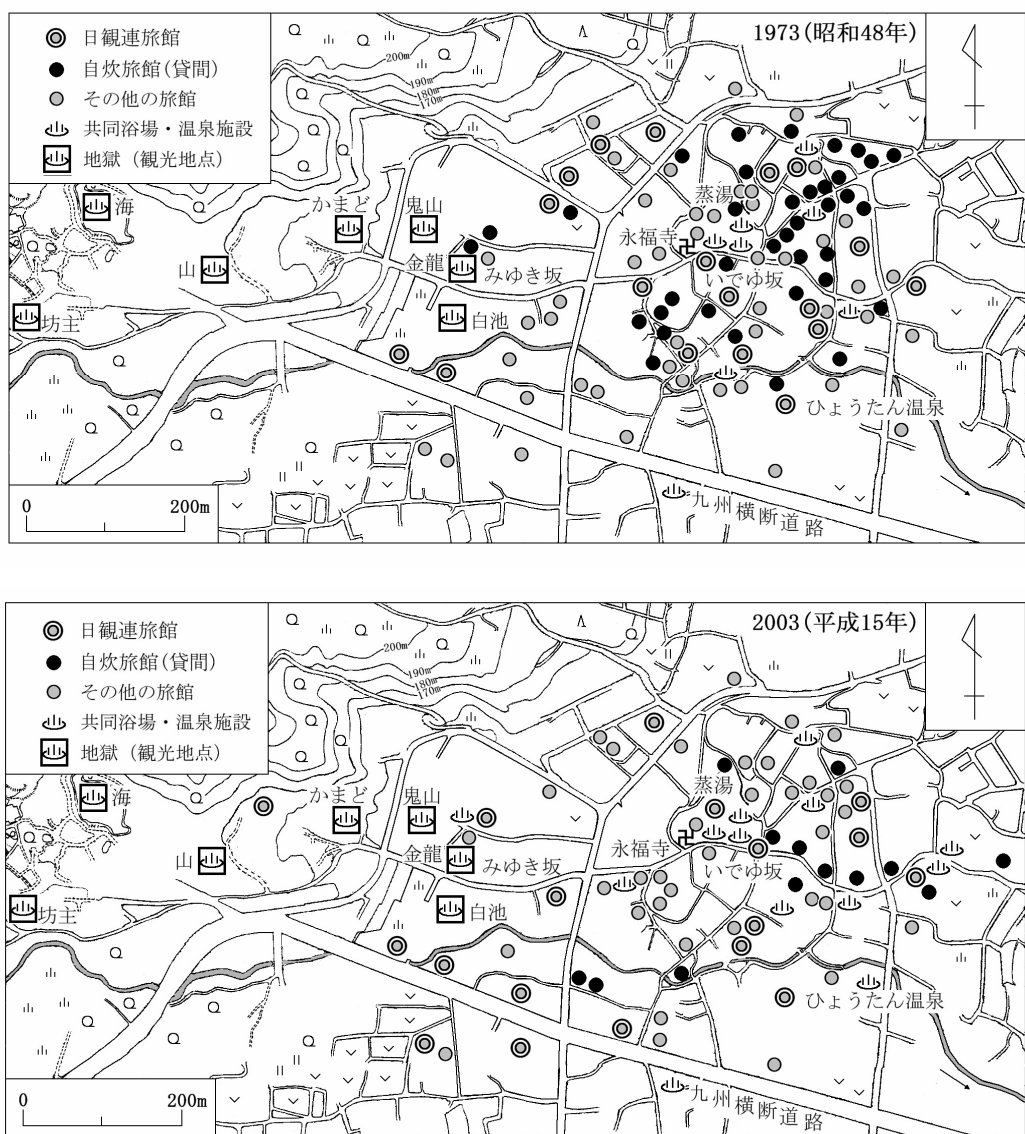


図3 鉄輪温泉における旅館・共同浴場・地獄などの分布と地域変容(1973・2002年)  
(注) 実地調査により作成。日観連旅館は日本観光旅館連盟加盟旅館。

館へ変わったものが4軒あり、さらに自炊旅館の新設が3軒あった。ここに、高齢化社会を迎えて、貸間による料金の低廉化を図り、人件費や食材などの費用を減らして、合理的な経営を志向している経営者の姿勢がうかがえる。

一方、観光地区では大型観光旅館の倒産も見ら

れ、先述したような1965(昭和40)年以後に開業した九州横断道路沿いの比較的大規模な観光旅館は、単に宿泊機能を提供しているのみであり、経営的苦境に立たされている。国内観光客数の減少は避けられなく、その影響を受けて最近では、韓国や台湾・中国といった近隣アジア諸国にも精

力的な宣伝活動を展開しており、時期によっては宿泊客数の大半が外国人の時もあるという（浦 2005a）。政府のインバウンド促進政策と相まって、今後このような大規模旅館・ホテルが中心となり、ますます別府を訪れる観光客の国際化が進んでいくものと考えられる。そのような意味でもこのような観光機能は不可欠であり、湯治機能との共存を図ることが求められよう。

## (2)入湯客の地域変化

鉄輪温泉で湯治生活を送る人々には、どのような特性が見られるのであろうか。山村（1974）による 1972 年当時の聞き取りによると、平均 1 週間の滞在をする固定客が多く、地獄釜で自炊をしながら毎日過ごす。大半は宿で気ままに寝泊りしながら、宿の温泉に浸かったり、蒸し風呂を利用していた。

東北地方の湯治場では、自炊のためにガス代などがかかるが、ここでは蒸気を利用するので無料である。地獄釜の並んだ炊事場には、ご飯 1 升 1 時間・ふかし芋 30 分・茹でたまご 8 分・ほうれん草 5 分などと書かれた看板が下がっている。

宿泊料金は、自炊旅館（入湯貸間）においては 1 泊炊事道具付で 700～1,000 円程度であり、この低料金システムが長期滞在を可能するのである。2002 年でも約 3,000 円ほどであり、観光旅館に比べて格安で滞在できる。

湯治客の変化について、1972（昭和 47）年と 2002（平成 14）年を比較した（図 4）。温泉地全体の資料が得られないので、ここではサンプル自炊旅館 2 軒の宿泊人名簿を分析した。まず A 自炊旅館の 1972 年の場合、大分県内が 8 % と著しく少ないのに対して、福岡県が 47 % と約半数を占めている。そのほかでは、広島県や香川・熊本・山口県などが比較的多い。特に福岡・広島・香川は有力温泉地が少なく、また別府との船便による交通の便が良いために、定期的に鉄輪湯治が行われているようにもなり、これらの地域との結合が

強められたのである。湯治客の口コミ宣伝があり、地域的には局地性を強めながらも広域観光市場が形成されている。また、平均滞在日数はおおよそ 1 週間程度であるが、2 週間以上の療養客もあり、まさに長期滞在で特色づけられていた。

一方、B 自炊旅館の 2002 年現在の状況を図 4 からみると、かつての A 旅館と同様に福岡県や広島県を最大市場としているが、四国の地位は低い。さらに、近畿地方やその他の地方からの湯治客が大幅に増加していることが指摘され、その市場性は全国的となっている。近年では、既述したようにマスメディアの影響により、市場の広域化に拍車がかかっているといえる。

しかし、滞在日数では平均 3 泊台にとどまっており、かつての 1 週間以上の長期滞在療養客は減少している。代わって比較的若い年齢層の客が、ストレス解消や健康づくりを目的に 2～3 泊くらいで湯治体験をするケースが増えていると言える。

湯治客の年齢構成は、1972 年では 60 歳以上が 65 %（うち 70 代以上は 33 %）であり、既に高齢者が圧倒的に多い。また、職業構成では農業 63 %、商業 16 %、無職 11 %などであり、農業との結合が強かった。2002 年では、年齢は 60 代後半から 70 代以上の高齢者が圧倒的に多くなっており、主に退職後に夫婦連れで来訪している。

## (3)新しい地域づくり

鉄輪温泉は、湯煙景観と貸間を象徴として、伝統的な湯治場の雰囲気を残し、別府温泉郷の中でも最も温泉場らしい貴重な空間である。一方では、温泉観光都市の形成過程の中で、地獄巡りを象徴とした観光ルートの形成や、九州横断道路路沿いにおける大型旅館・ホテルの建設など、観光化の波も及んできた。しかしながら、鉄輪温泉の場合は、地域内で湯治特化地区と観光特化地区に二極分化した地域形成がなされてきたので、それぞれの特色を活かした地域づくりが可能な状態にあることは幸いである。現在、鉄輪温泉では、別府という



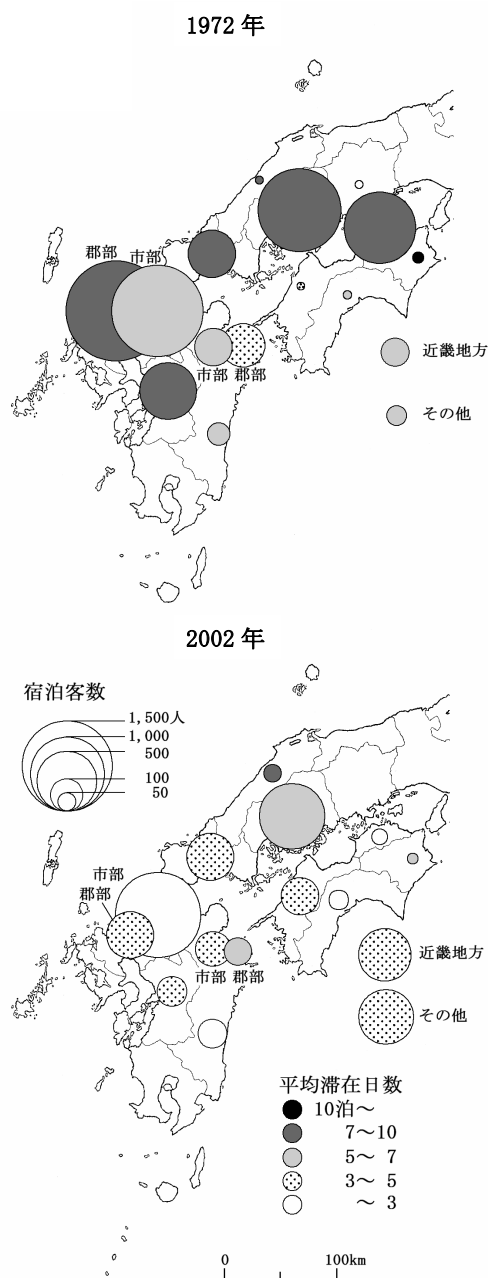


図4 鉄輪温泉における湯治客の居住地と平均滞在日数の変化（1972・2002年）

（注）2 自炊旅館の宿泊人名簿を集計して作成。

一大温泉観光都市の広域整備の中で、伝統的に維持・継承されてきた湯治場としての地域性を、新しい形で再生・発展させようという動向が顕著になっている。例えば、既存の観光旅館が、今まで

の流れに逆行する形で相次いで自炊機能を復活させたり、新しい形で湯治客・保養客を受け入れる体制が整備されつつある。また、最近では湯治地区の町並みにおいて、町並み保存の要領で和風木造のファサードへの統一や建て替えなどが図られており、このような景観整備によって伝統的な湯治場景観が蘇えりつつある。さらに、鉄輪温泉のシンボルでもある市営蒸し湯の改修や湯煙景観のライトアップ、湯煙景観展望台の設置、鉄輪愛酎会による湯煙俳句の募集および句碑の設置、ソフト事業の地域ガイドなど様々な地域づくりが始まっており、鉄輪温泉の現代的湯治場としての再生が期待される。特に、月2回実施される鉄輪温泉湯煙散歩は、別府に宿泊・滞在している一般観光客から地元の日帰り観光客まで、毎回常に多くの参加者を集めており、地元のガイドが鉄輪温泉エリア内の名所から穴場までわかりやすく説明しながら、地域理解を広めるとともに地元住民と観光客との交流が図られ、内外から評価されているのである（浦 2003）。

#### IV むすび

本研究では、東北・九州の代表的湯治場である東鳴子温泉および鉄輪温泉を事例として、主に地域変化および入湯客の変容と実態、地域づくりなどの観点からその機能変化の究明に努めた。

東鳴子温泉は、ほとんどの旅館において伝統的な自炊機能を保持し、地元の農・漁民との結びつきを残しながらも、新しい都市からの湯治客においても地域主導で対応し、療養機能を前面に出した地域づくりが展開されている。

一方、鉄輪温泉は、別府温泉郷の一角にあり昔から貸間を中心に一大療養温泉地が形成されてきたが、高度経済成長期以降、貸間の減少とともに療養機能が著しく低下し、比較的狭小なエリアの中に、地獄めぐりを中心として大規模ホテルが建ち並ぶ「観光エリア」と、自炊旅館である貸間や

共同浴場を中心とした「湯治エリア」2タイプの地域が形成され、ニーズも多彩となっているのである。

高齢化社会やストレス社会といわれる現代社会の中で、全国的に温泉本来の機能である湯治が見直されている現状にかんがみ、東鳴子や鉄輪温泉をはじめとする現代的湯治場としての地域性は、今後ますます大きな意義を有することになるであろう。

かつて、温泉の効能を求めて来訪する湯治客は、長期にわたって滞在するのが一般的であった。それは単に温泉療養の場として機能するだけではなく、労働の厳しい農漁民の保養の場としても機能してきたのであり、田植え後の泥落としや秋の農産物の収穫後や漁獲後の骨休め、風邪をひかないための寒湯治と称しては湯治場を訪れ、10日以上以上の長期滞在をするという習慣が根付いていた。しかし、第2次世界大戦後の高度経済成長にあわせて、多くの湯治場は1泊宿泊型の観光温泉地へと大きく変容することになる(山村 2003)。このような中で、高度経済成長期における温泉地の実態について究明し、さらにその後の安定成長期から平成時代と機能変化しつつある温泉地の現状を具体的に把握するとともに、その地域変化を明らかにしたうえで、温泉地域づくりの実態や問題点を明らかにすることは、かつてマス・ツーリズムのもとに画一化し、平成不況の現在、経営不振に直面している温泉地の活性化方策を呈示するきっかけになるとともに、日本における持続可能な温泉地域社会づくりの方途を示す契機となろう。

筆者が国土館大学地理学教室在学中、多大なる御指導・御鞭撻を賜り、人文地理学研究の道へと導いて下さった長島弘道先生の御退職に際して、深甚なる謝意を込めて本小論を献呈致します。

#### 【参考文献】

浦達雄 2003.別府温泉郷における街づくりの動向.

温泉地域研究 1:23-28.

浦達雄 2005a.別府温泉郷における観光客の動向.  
大阪明浄大学紀要 5:13-25.

浦達雄 2005b.別府温泉郷における旅館経営の変容.温泉地域研究 4:17-28.

大沼伸治 2004.生活力を活かした地域づくり—東鳴子温泉現代湯治3日モニターツアー—.日本温泉地域学会第3回研究発表大会発表要旨集:13-14.

菊池莊悦 2003.鳴子温泉郷の温泉療養プラン.日本温泉地域学会第1回研究発表大会発表要旨集:15-16.

小堀貴亮・山村順次 2004a.別府市鉄輪温泉における湯治場の地域変容.温泉地域研究 2:49-54.

小堀貴亮・山村順次 2004b.宮城県東鳴子温泉における湯治場の地域変容と活性化.温泉地域研究 3:11-18.

進藤和子 2004.温泉地における長期滞在生活の可能性と課題.温泉地域研究 2:73~74.

鳴子町史編纂委員会 1974.『鳴子町史上巻』鳴子町.

山村順次 1975.別府市鉄輪療養温泉の実態.温泉 42(9):28-30.

山村順次 1977.鳴子温泉郷における湯治客の地域的特性.千葉大学教育学部紀要 26(1):245-256.

山村順次 1995.『新観光地理学』大明堂.

山村順次 1998.『新版日本の温泉地—その発達・現状とあり方』日本温泉協会.

山村順次 2003a.日本における湯治場の変容と地域振興.温泉地域研究 1:1-10.

山村順次 2003b.湯治場の機能変化と活性化方策.総合観光学会編 2003.『観光の新たな潮流』同文館出版:161-174.